

# だれ一人取り残さない学校をつくる

## ～学校力と教師力の向上による不登校対策～

富士宮市立大富士小学校 校長 鈴木 美和子

### 1 はじめに

全国の不登校児童生徒は年々増加の一途をたどり、昨年10月に文科省より、令和4年度は約30万人との報告があった。個別最適な学習の保障と、だれ一人取り残されない学校体制の構築が急務となっている。

本校の全校児童数は、令和4年度857人、令和5年度868人、令和6年度836人である。それに対し、各年度末の不登校児童数は、4年度32人、5年度38人であった。また、特別支援にかかわる児童も約130名いる。本校に赴任した4年度から、不登校対策と特別支援教育の充実を最大の教育課題と捉え取り組んできた。しかし、不登校児童は年々増加している。新たな不登校児童を生まないためにはどうしたらよいか、その兆しをいかに察知してどのように初期対応を行うことが有効なのか、研究を進めたいと考えた。

### 2 研究の目的

コーディネーターを分掌化し、スクールカウンセラー（以後SC）スクールソーシャルワーカー（以後SSW）・不登校支援員等との連携を図り、学校体制を整えることによって、不登校の原因や要因を探り、一人一人のニーズに合った支援体制を構築する。教師力を高め、新たな不登校を防ぎ、子どもにどのような力を育む必要があるのか検証する。実践を積み重ね、だれ一人取り残さない学校をつくることを目的とする。

### 3 研究の内容

#### (1) SC・SSW・不登校支援員・他機関との連携を深める

本校には、木曜日にSC、水曜日にSSWが配置され、さらに火曜午前に市の不登校支援員が来校する。困り感のある子どもや保護者をこの3者のだれにつなぐことが適切か判断することが課題となった。

令和4年度は、生徒指導主任をコーディネーターとし、SCやSSW、不登校支援員それぞれに対応シートを作成していた。その中で、3者での情報共有が必要になり、学校側も毎週3枚の共有シートを作成しそれ

それを閲覧し状況を把握する煩雑さが生じた。

そこで、令和5年度は主幹教諭を窓口にして、3者の動きが1枚のシートで分かるように工夫した（資料1）。さらに、ミーティング内容や、現在のこどもの状況と課題、担当相談者が分かるよう一覧にしたことで、全職員で情報共有できるようになった。

学校の日課	火	水	木	金	ミーティング内容
8:00-8:10 朝の活動	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
8:10-8:55 1時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
9:05-9:50 2時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
10:10-10:55 3時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
11:05-11:50 4時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
11:50-13:00 給食・清掃	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
13:05-13:20 昼休み	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
13:25-14:10 5時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
14:20-15:05 6時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
放課後	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		

「資料1 R 5 SC/SSW/ 不登校支援員情報共有シート」

学校の日課	火	水	木	金	ミーティング内容
8:00-8:20 朝の活動	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
8:20-9:05 1時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
9:15-10:00 2時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
10:20-11:05 3時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
11:15-12:00 4時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
12:50-13:05 給食・清掃	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
13:05-13:20 昼休み	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
13:25-14:10 5時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
14:20-15:05 6時間目	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		
放課後	不登校: さん	SSW: さん	SC: 先生(準連)		

「資料2 R 6 SC/SSW/ 不登校支援員 情報共有シート」

さらに、令和6年度は、欠席日数が増加傾向にある子を記載し（資料2）、担任が学年部職員と複数で初期対応を行えるようにした。これまでの対応から、次のようなつなぎ方が適切であると分かった。

- 子どもや保護者の困り感が和らぎ、学校が子どもや保護者の願いをつかむためには、SCとの面談が効

果的である。

- ・児童相談所や家庭児童相談室等、福祉関係との連携が必要になりそうな場合は、SSW の面談から始めることが効果的である。
- ・登校を渋り始めている場合は、登校している間に不登校支援員がこどもや保護者と接点をもっておくと、家庭訪問につなげることができる。
- ・複雑な要因が絡み合っているケースは、3 者の勤務を調整して3 者そろってのケース会議を実施し、役割分担を明確にして、3 者でそれぞれ対応することもできる。

3 者の対応に管理職も関わって、必要に応じて別室対応を考えたり、外部の適応指導教室や児童相談所等と連携したりすることで、一人一人の居場所を見出すことができた。

## (2)別室対応「そよ風ルーム」の設定

令和 5 年 9 月、3 年生 2 名が新たに教室には入れない状況となった。そのままでは不登校になると考えたため、別室での対応を提案した。そこに、令和 4 年度途中より登校できていない 6 年生と、4 年生が加わり、4 名の別室対応を開始した。別室の名前をやわらかな教室経営をイメージし「そよ風ルーム」と名付けた。

「資料 3 R 5 そよ風ルームウィークリースケジュール」

この 4 名は、学習面でも個別支援や配慮が必要であり、自分だけではリモート参加もできない状況であったため、常に大人がついて補助する必要があった。そのため、各教室とつながるためにも、補助に入った大人が、その時間の学習内容を理解して対応する必要があった。そこで、4 人のスケジュールを 1 枚にまとめ（資料 3）そよ風ルームに掲示し、だれが支援に入っても何を学習するか分かるようにした。

この部屋を運営するために、市の退職校長ボランティアに依頼し、月・木・金曜日の支援員を確保した。また、教育実習生によるボランティアも活用し、学級担任の事務時間を使うことなく、休み時間も含めた全

時間の支援を可能とした。

10 月からは、少しずつ、学級との接点を増やし、個々に短期目標を設定するようにした。その間、SC や SSW との面談を継続し、毎週火曜日は不登校支援員と目標確認を行った。その結果、3 学期からは、2 名が教室に戻ることができるようになった。

しかし、2 月から、新たに 5 年生女子 5 名が、そよ風ルームを活用することとなった。別室があることで救われることもあるが、安易に別室に逃げてしまう傾向や担任のみの判断で使用を進める様子も見られ、新たな課題となった。

**大富士小 そよ風運営 スタンドアード**

ねらい

- ・教師や友達との関係や、学習の遅れなどで教室へ入りづらくなり、不登校またはそうした傾向となっている児童生徒の、学校に教室以外の選択肢となる。
- ・「居場所（別室）」を増やし、個別の生活・学習指導や教師・友達からの声掛けといった積極的な指導・支援を行うことにより、学び機会を確保する。

※根拠：教育機会確保法（平成 29 年 12 月）

どんな子が別室で？

- 不登校傾向が強く、欠席日数が増加傾向にあることも
- SC や SSW との面談、担任や担当（主幹または学年主任）との面談を重ねていることも
- 保護者も外部機関に相談するなど、別室登校に理解があることも

※そよ風 room は希望があればすぐ入って心を整える、クールダウンや一時保護等を目的としない。いじめや担任不備、実行不良のこどもの場合は別に対応を協議して決める。

運営方法

主幹：コーディネーターとしてこどもと保護者、担任、SC、SSW とつなぐ

- 対策会議
- 記録ファイル等、情報を共有するファイルの作成

担任：こどもの傾聴に努め信頼関係やきずなを深める

- 一日一回はこどもと会い、スモールステップの目標と一連間の予定、交流する授業をこどもの思いに寄り添って決める。（こどもに決定権を委ね、実践する中で心エネルギーを貯める。
- できたことやできてきたこと、前向きな思いをもてたことを認め励ます。できなかったことにフォーカスせず、次の行動目標を無理のないように決めていく。
- 相談は主幹や学年主任、SC、SSW とともに行う
- 利用について一人で判断しない、組織で判断してから、保護者と連携を進める
- 個人記録票の作成（スズキ校務に記入）
- 選定の作成 オンラインや通紙ができないときはスマイルネクストやタイピング、ソーシャルスキルゲーム等、その子にあった対応を伝える

職員：互いに自分のクラスの子が、...と自分ごととして捉え、できることを率先して協力する

※状況に応じて、こどもや保護者とのかわりをもつ

※多くの目でこどもの心のエネルギーを貯められるように励ましていく

※必要があれば対策会にも出席する

「資料 4 そよ風ルーム運営スタンダード」

そのため、そよ風ルームスタンダード（資料 4）を作成し、教職員間で共通理解を図った。別室を希望する保護者にも理解していただき、SC や SSW との面談の上で利用するかどうか決めていくこととした。

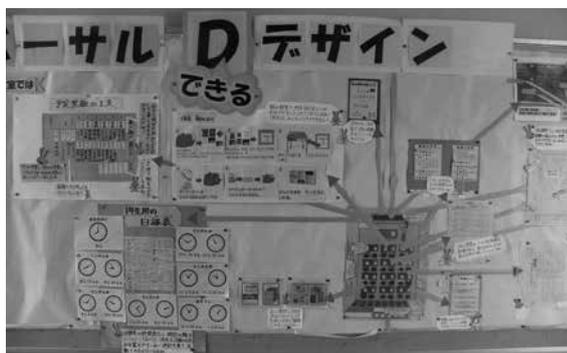
令和 6 年度は、前年度 3 学期から継続の 6 年女子の対応をどうするか検討した。1 名は、医療機関にもかかり地域の支援センターを活用することとなった。他の 4 名は、年度当初は各学級でスタートできたが、5 月連休明けから教室が苦しいとの相談があった。3 名は、6 年部の教材室を整備し、教室とのやりとりも継続できるようにして、リモートで授業を受けている。1 名は校長室に登校し、3 校時から教室に行くこととした。教材室の 3 名は担任と予定を確認し、学級のみならず参加する授業を決めている。いずれも、SC、

SSW、不登校支援員が来校時に関わり、状況を本人と確認し短期目標を設定し、担任や学年部と連携して取り組んだ。5月末の運動会への参加は、本人と周囲の協力の賜である。

### (3)授業力・学級経営力・生徒指導力を高め主体性を育てる

#### ①特別支援教育の充実

個別の対応と同時に、新たな不登校児を生まないために、教師の授業力・学級経営力・生徒指導力を高める必要を感じた。そこで、令和4年度は、ユニバーサルデザインについて研修を深め、環境を整えることから実践を始めた。教室の環境設定を学年で揃え、朝や休み時間、給食の時間についてもこどもが見通しをもてるよう提示資料を作成した。令和5年度は、授業におけるユニバーサルデザインを研修の柱に据え、だれもが「わかる授業」について年間6本の研究授業を実施した。特別支援コーディネーターからは、個の特性と見取りや支援について職員向け便り（令和6年現在147号）が発行され、全職員で共通理解を深め取り組めるようになってきた。また、校内にユニバーサルデザインについて掲示し、こどもとも共通理解が図れるようにしている。（資料5）



「資料5 UD（UうまくDできる）掲示版」

#### ②園小中連携による well-being の実現を目指す

令和2年度から小中共通のグランドデザインを作成してきた。令和6年度は、小中の連携をさらに深め、「多様な考えを尊重し、well-beingの実現を目指す」という学校経営目標を掲げ、研修・生徒指導・特別活動・特別支援教育・健康体育・情報教育の専門部会ごとPDCAサイクルを機能させ連携した活動を行っている。4月・2月に専門部長会、5月・11月に園小中合同研修会、7月には小中合同SC・SSW研修会を実施し、園・小・中の教師がこどもの姿で語り合い、同じ方向を確認し合い日々の実践につなげている。

#### ③教師の指導力向上研修

研修主任が計画を立てる年間6本の授業研究以外

に、次のような研修を実施した。

#### ア 特別支援研修

特別支援教育相談員による講話を令和4年度から毎年夏季校内研修に位置付け実施している。UDの理解、特性による支援の在り方、事例を通しての合理的配慮の有効性等、明日に生かせる内容である。

通級指導教室担当者によるミニ研修も随時実施している。漢字の学習や認知の違いによる効果的なアプローチを学び、日々の授業に生かしている。

#### イ SC・SSWによる夏期研修

毎年、小中合同で、半日研修を実施している。令和4・5年度は、こどもの声を聴く重要性を、6年度は、自傷行為と自殺予防を中心に実施した。いずれも、『傾聴』の大切さを演習を通して研鑽した。

#### ウ 外部講師の研修

令和6年度は、コーチング研修（資料6）、ビジョントレーニング研修、不登校児童対応研修、I-check活用研修など、専門家を招いての職員研修を実施している。



「資料6 コーチング研修」 「資料7 いのちの授業」

#### ④「自分にはよいところがある」と実感する活動

キャリアパスポートに「自分のよいところ」を書く欄があるが、本校には、「ない」と書く、または空欄の子が2割以上いる。不登校のこどもたちの多くが不安を抱えていることを考えると、不登校防止には、自己肯定感と有用感の向上が大切だと感じた。そのため、令和4年度は、各学級での帰りの会の「よいこと見つけ」、全校での「今日のキラリ」の放送に取り組んだ。

令和5年度は、文部科学省の「がん教育等外部講師連携事業活用実践校」の指定を受けた。6年生の保健の授業実践のため、がん患者の方々やドクターや看護師による講話や道徳授業をダイナミックにカリキュラム・マネジメントした。これに関連して、5・6年生は、助産師等による「いのちの授業」を行った。生命が誕生する神秘やいのちの力のすごさ、生まれてくることのできなかつた命の尊さを聞くことで、自分のいのちの大切さを実感し、自分と同じようにだれのいのちも大切であることに気付くことができた。（資料7）

がん教育だけでなく、様々な大人との関わりが個別

最適な学びの伸長につながったり、学習が深まる過程で自分のよさの発見につながったりする振り返りが見られた。そのため、全ての学年で、外部講師やボランティア、地域学校協働本部事業の活用を進めた。

また、令和6年度は、コロナ禍で低迷していた大規模校ならではの特別活動の実施に重点を置いている。6年ぶりに、全校児童が一堂に会しての運動会を実施し、高学年児童の活躍の場を設定した。さらに、委員会活動で高学年主導のイベント事業を推奨している。

#### ⑤こども全員の声を聴くトークタイム

6・11・2月に、担任が学級の全児童と話をしているトークタイムを設けている。一人5分程度の時間ではあるが、担任が気になっていることを尋ねたり、こどもが困っていることを相談するきっかけになったりしている。トークタイムでの内容によって、その後設定されている保護者面談で保護者と話し合ったり、SC・SSW等につなげたり、学年部や管理職と情報共有して対応したりした。職員研修での傾聴スキルも生かされ、不登校やいじめの早期対応にもつながった。何より、こどもと担任との関係がさらに良好になり、こどもの安心を生み出している。

#### ⑥親子のつながりを強める学習スピーチ

令和6年度より、学校で学習したことを保護者に話すという宿題「学習スピーチ」を導入した。5月と7月の朝礼で、校長が母親役、教員がこども役になって例を示した。それを、学校便りで伝えることで保護者にも理解していただいた。

学習したことを伝えることで、自分の理解状況が分かるメタ認知力を育むことが主たる目的であるが、親子で日常的に会話する機会となってきた。保護者からも、「以前は学校のことを話してくれなかったが、宿題のおかげで、学校の様子も分かり、ノートや教科書を自分から見せてくれるようになった。」との声が聞かれた。こどもの自己肯定感を高めるためには、承認欲求を高める必要がある。この取組による保護者とこどもの対話が有効だと感じている。

#### 4 成果と課題

令和4年度には、不登校が心配される子が80名以上であったが、令和5年度は60名、令和6年度は46名と減少してきている。今年度は例年に比し、全く学校に来れない子も減少している。対応策が少しずつ分かり始め、早期発見もできるようになってきた。複数の原因が絡み合っているのが現状だが、大まかに次のようなことが考えられる。

- ・発達特性が要因になっていることが多い。

- ・低学年は、母子分離が難しいなど、親子関係の難しさが考えられる。
- ・中学年以上は、学習とコミュニケーションの困難さに気づき、不安が増大し不登校につながることもある。(IQ80台の子にその傾向が表れることが多い。)
- ・高学年は、HSC傾向の子や集団生活になじめない女子に増加傾向が伺える。
- ・保護者も相談する機会がなく、困り感を抱え、対応に苦慮している。

これらは断言できるものではなく、3年間の本校の対象児の傾向から考えられる要因である。

だれ一人取り残さない学校を目指して、個別対応ができる学校体制づくりと、魅力ある学校づくりを並行して行ってきた。個別対応は、SC・SSW・不登校支援員、特別支援教育相談員、児童相談所、医療機関、社会福祉関連事業所等との連携である。本校では、不登校あるいは傾向のある全てのこどもに対応できる状況を構築してきた。また、昨年度別室登校4名と、昨年度不登校4名の計8名が、今年度は教室復帰できた。これは、担任があきらめずに細く長く関わり続けたことと、前述の他機関との連携による成果である。

不登校のこどもの全てが学校復帰することを目標にしているわけではない。その子の居場所をつくること、その子とのつながりをもち続けること、その子と保護者に寄り添うことを大切に、一步一步、その子の自立に向けたあゆみを、共に進めてきた。

学校評価の結果を見ると、講師やボランティアとして地域の人との関わりを増やしたことが、学びの深まりにつながっていることが分かる。そして、傾聴や特別支援等の研修により、教員がこどもの話や声に耳を傾け、授業改善をすすめ、「学校が楽しい」と考える子も増えてきたと考えられる。

学校評価 評価項目	R6	R5	R4
学校が楽しい	89%	84%	84%
地域の人と一緒に学び、学びを深めている	87%	82%	68%
先生は私の話をよく聞いてくれる	94%	90%	92%
自分にはよいところがある	75%	74%	73%

「自分にはよいところがある」については、微増してはいるが、本校の課題として取組を創出していく必要がある。今後は、個別対応も継続しながら、こどもにとってさらに魅力ある楽しい学校にしていきたい。